

サウンドスケープの表現形態における歴史的変遷とその意義

正会員 ○岩塚 一恵*
同 鷗沢 隆**

サウンドスケープ 実験芸術 相互作用
草月アートセンター 環境 メディア

はじめに

1970年代前半に「サウンドスケープ」※1という概念が、現代社会における新たなコンセプトとして提唱されて四半世紀以上が経つ。現在、提唱者であるマリー・シェーファーのみならず、日本を始め各国でこの言葉を耳にする。サウンドスケープ概念成立の背景には、従来の現代音楽からの流れにおける必然的な展開があることは広く認識されているが、現在では、都市、社会、環境をめぐる様々な思想や、芸術活動、デザイン分野にまで及ぶものになっている。このような背景から本研究では、サウンドスケープという概念を、従来の社会活動の枠組みや考え方が根本から転換しつつある時代の映鏡と捉える。そして、都市環境から自然環境に至るまでの音環境調査を通じて新たな音の概念を構築したサウンドスケープの方法論が、芸術全般、あるいは他の表現形態へどのように投影され、新たな可能性が現れているのかを探ることで、別々の分野や表現方法とも思われていた出来事や作品を捉え直す試みである。

研究方法

本研究は、マリー・シェーファーが提唱したサウンドスケープ概念が成立した前後の関連事例を、芸術運動、時代背景、技術との関係の中で取り上げ、どのような影響を与え合い展開しているのか、事例、関連文献を通して考察する。そこから現出する流れ、繋がりを、音、社会環境、自然環境との相関関係として表すことで、現代のサウンドスケープの表現形態の新たな傾向を導き出すことを目指している。

1950-60年代の日本とアメリカにおける芸術活動

1970年代のサウンドスケープ概念成立前、1950-60年代の芸術の動向で特に着目すべきことは、アメリカの実験的前衛音楽家、ジョン・ケージ(1912-1992)の活動に触発された、多様な分野の実験や交流が盛んに行われたことである。日本では、初めてケージやニューヨークから帰国した一柳慧の作品が上演され、大きな波紋を投げかけた。また、ほかにも当時日本では初めてであったライブ・エレクトロニック・ミュージック、ハプニングを含んだプログラムによる作品発表会が行われた。このように、日本で初めて、実験的精神の溢れた芸術が誕生し、建築か

らデザインまでを含めた多くの分野の芸術家たちの、ジャンルを越えた交流と共同作業が行われたことは特筆に値する。※2

一方同年代のアメリカでは、美術・建築界・舞踏界などの分野に先鋭的な人々が出現し、独自の芸術を確立した。1950年前後、ケージはブラック・マウンテン・カレッジで教鞭を執り、ケージの作曲の授業にはラ・モンテ・ヤング、ジョージ・ブレクトら後のフルクサスを構成するメンバーが出席していた。また、1958年からニュー・スクール・フォー・ソーシヤル・リサーチで、ケージによる実験音楽講座に参加していたオノ・ヨーコは、NYで自分のロフトを解放してイヴェントや展覧会を行った。※3 こうした様々な出会いと相互作用は、フルクサスの活動をより活発にした。マリー・シェーファーや、その後の現代美術、デザインに及ぼした、これらの日常と芸術表現の境をなくそうとする、または日常を創作の糧とするような姿勢は、50、60年代の実験芸術・フルクサスの先駆的な試みであり、現代のサウンドスケープの表現形態にもその要素を読み取ることができる。

1970-80年代 メディアの発展

1970年頃から現代に至る間の技術的メディアの発展は目覚ましいものであった。※4 メディアの発展は聴取体験の変化をもたらした。とりわけCDの出現は聴取体験そのものを多様にし、意識と無意識の狭間で音を楽しむ聴取の可能性を開いた。そうした傾向は、BGMや環境音楽といったジャンルをつくり、触覚的な聴き方をも可能にした。これらの背景となったメディアの発展は、表現形態や思想にダイレクトに反映され、新たな表現形態の発展要素となった。

現代における「サウンドスケープ」の表現形態

1980-90年代を中心に、音を主題とした表現形態が輪郭を持って現れた。サウンド・アート、サウンドスケープ・デザインと呼ばれるそれらの領域は、音と空間に対する意識の高まりの表れであった。また、80年代後半、バブル期の博覧会ブームや生活環境の快適性を追及する志向、90年代の地球環境問題に対する意識の高まりの中で、音が重要な要素として注目を浴びたことも一つの要因であった。

・サウンド・アート

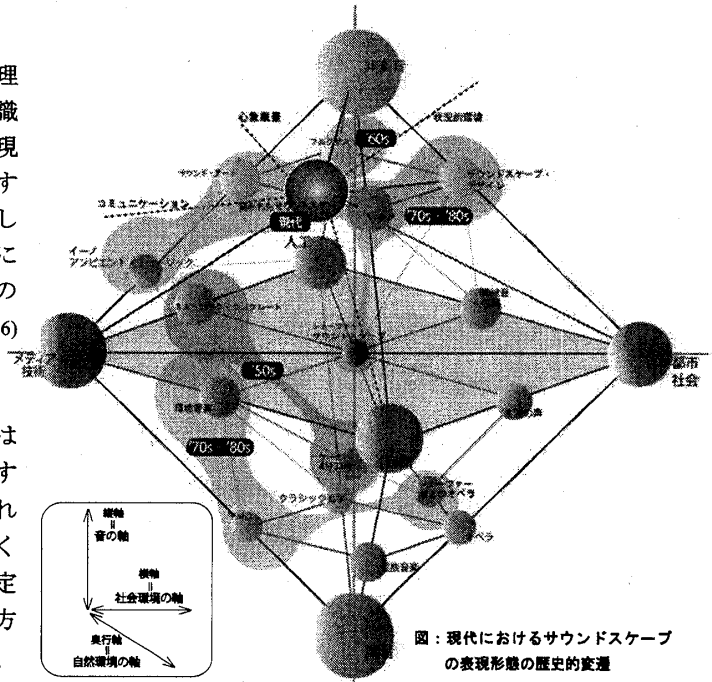
音というメディアを主題としたアート作品は、音の物理的特性そのものを取り上げて表現するもの、普段無意識な音への意識を開かせるような、きっかけとしての表現展開、の主に2種である。後者に当たる、音を聴きだすことが創造的な行為であるということをもっと端的に示した鈴木昭男の「ひなたぼっこの空間」(1988)、日常の音に対する気づきを一貫して創作の糧とする藤本由起夫の「EARS WITH CHAIR」(1990)、「美術館の遠足」(1997-2006)等は、サウンド・アートの先駆的な例である。

・サウンドスケープ・デザイン

BGMのように音そのものだけを空間に添加するのではなく、PA装置などのように音響技術の設計だけを意味するのでもない、それらすべてを含み、音響体が設置される環境との関わりの中で広く音風景をデザインしてゆく態度を、本稿では「サウンドスケープ・デザイン」と定義する。それらは、受け手や周囲の状況によって捉え方や作用の異なる、音とそれを聴く人との意識や関係性、相互作用に着目している点が特徴的である。

まとめ 開かれたサウンドスケープ

1950年代、コンサートホールでケージが発表した「4分33秒」は、「楽音」と「非楽音」の区別を根本から問い直す革新的な行為であった。その後1960年代を中心に、ケージに触発された実験芸術やフルクサスの活動はコンサートホールやギャラリーを飛び出し、様々な場で「音」による新しい試みを提示した。また、聴覚的観点から環境への意識を開こうとする「サウンドスケープ」概念は、そうした流れを汲みつつも1960-70年代の騒音問題に対する一つの方法論として確立されたが、その考えは、1970-80年代を中心に、積極的な諸感覚の統合を導く方法論として展開され、アートやデザインのコンセプトとしてその広がりを見せてきた。このように、現代のサウンドスケープの表現形態は、音や聴覚のみには終始せず、様々な環境や他者との関係性を対象として進化を続けていることが分かる。こうした一連の流れを、サウンドスケープの表現形態の歴史の変遷として図に示す。ここでは、縦軸を音に関わる軸とし、横軸に都市やメディア技術といった、社会環境の軸を、奥行軸に自然環境の軸を想定する。相関関係でプロットされた各事象を年代でまとめると、1950年代から現代にかけて、音の軸上から周辺的环境軸へ広がりを見せていることが分かる。また、1970-80年代には、メディアを用いた新しい音楽としてその発展を続けるものと、1960年代のフルクサスの活動との関係性を持ちつつ、具体的なアート、デザインとして発展する分岐が起こり、現在、後者を中心とした表現が、対象を変化させ発展していることが示された。



図：現代におけるサウンドスケープの表現形態の歴史の変遷

以上の結果から、現代におけるサウンドスケープの表現形態の特徴として、多方向との関係性を持つこと、その対象は人の心象風景や環境、コミュニケーションといった多義的で不確定な要素が多いことが読み取れる。それはまた、表現の最終形を委ねる、あるいは未完のままに発展し続ける可能性を孕む表現形態とも言い換えられる。こうした傾向はすなわち、現代におけるサウンドスケープが音環境のみを対象とするのではなく、音環境を超えた現象、環境をも対象としながら展開されていることを示しており、その表現形態は有機的な繋がりを持ちながら諸感覚の統合へ向けた進化を続けている。

註 ※1 現代カナダを代表する音楽家マリー・シェーファー(1933-)は、「サウンドスケープ」(soundscape=音の風景)という用語の考案者であり、「音響生態学の開拓者」としても、世界的に知られる人物である。シェーファーは、1965年に新設と同時に赴任したサイモン・フレーザー大学で騒音に悩まされ騒音研究を始めたが、その限界を知り「騒音問題を含む音環境全体」を扱う研究の方法論を探る必要があった」と著書『世界の調律』(『The Tuning of the World, New York: Knopf, 1977』)の中で述べている。サイモン・フレーザー大学のコミュニケーション学部に「世界サウンドスケープ・プロジェクト」(=WSP)という音環境の調査研究のための拠点をつくり、1970年代前半を通じて、カナダ全土、ヨーロッパ各地へと「サウンドスケープ調査」を展開した。※2 その集大成として位置づけられ、画期的な成功をおさめた催しは1960年代後半に行われた「空間から環境へ」というイベントと、代々木国立体育館で行われた現代音楽祭「クロストーク・インターメディア」であった。1958年に発足した草月アートセンターは、それら多くの新しい芸術活動の拠点であり、パトロンの役割を果たすと共に、海外との文化の窓口としても重要な役割を果たしていた。※3 オノは1960年冬から自分のロフトを解放し、ラ・モンテ・ヤングの企画ものと12回に及ぶイベント(チェンバース通りロフト・シリーズ)を行った。ヘンリー・フリント、ロバート・モリスやオーコ自身など多数のアーティストが作品を発表し、観客の中にはアラン・カブロー、ジョン・ケージ、イサム・ノグチやマックス・エルンストらがいた。※4 国内で発売、浸透したものはテープ録音・再生技術、ヘッドフォン・ステレオ、ポータブルオーディオプレーヤー、ソニーのウォークマン、ハンディカム、パーソナル・コンピューター、ネットワークの普及などがあげられる。

*文化女子大学 助手
**筑波大学大学院 教授

*Full-time assistant, Bunka women's University
**Prof. Graduate school, University of Tsukuba